

じっくりみた米国の運動

さて直造のアメリカでの社会主義体験であるが、彼は帰国後においても結局は社会主義者であるよりは社会運動家であったように、アメリカでも特定の党派や主義に属することなく、その周辺にいただけである。周辺にいながら、アメリカ人の活動振りをじっくりと眺め、やがて日本へ帰ったらこのような運動をやろうと秘かに心を固めつつあった。

直造がアメリカに渡った頃はまだ人口は少なくて、ニューヨークなんぞ、たった十万人か十五万人くらいしか住んでいない土地であったが、アメリカ社会に移って最初に奇異に感じたことは次々に大統領が殺されることであつた。一番偉いはずの大統領が暗殺されることで、政治というものに関心を持った。

暗殺については資料を調べ、リンカーンが殺された際の記録も読んだとのことである。

殺したのは南部の役者で、劇場でリンカーンを射つた。その直後南部へ逃げたものの、当時すでに電信があつたのと、有名役者で面が割れているので捕つてしまった。すぐ背後関係の捜査が始まり、その男の下宿先を調べると、サン・シモン、ブルードン等フランス社会思想家の著書がでてきた。下宿のおばさんも役者に協力して、一党四人が陸軍の兵営内で絞首刑にされた写真もみることができた。

在米日本人の間で急速に無政府主義運動が燃え上がり始めたのは、明治三十九年から四十年（一九〇六、七）にかけてのことである。明治三十七年（一九〇四）にアムステルダムで開かれた第二イン

ター出席の途中、サンフランシスコによつた片山潜は、赤羽巖穴や岩佐作太郎ら日本人福音会の青年たちに助力を求めて、「社会主義協会」の設立を提案したが、これは数ヶ月足らずして有名無実化した。サンフランシスコ在住日本人が非戦を唱えてその急進的性格を明確にできたのは、翌年三十八年（一九〇五）二月、幸徳秋水が渡米してきて以降のことである。

しかしすでに議会主義を超えていた革命青年たちは、社会主義者幸徳にはいたく失望したらしい。直造は幸徳とは直接会っていないが、幸徳が帰国した一ヵ月後の七月一日にできたサンフランシスコ社会革命党の植山治太郎（丹波出身）と親しくしていたので、幸徳のことは色々聞いている。在米中の幸徳については、「あんなものは議会主義やないか」といい、「『社会主義神髓』なんぞ完全なマルクス主義や」とも語っていたそうである。

幸徳はアメリカから帰って、議会主義派と別れて直接行動派ダイレクトアクションに変わるのであるが、それを知っても直造は「付け焼刃や」といって信用していなかった。彼の観念嫌いの行動的体質と、アメリカの現実的革命家たちの運動を観察体験しては、容易に知識人幸徳の変言を肯定しなかったのである。

サンフランシスコ革命党はその後「天皇陸仁への攻撃」や「大統領ルーズベルトの暗殺企画」の当局側の陰謀や噂で、日本と全米を騒がせるのであるが、直造は社会革命党の具体的活動には参画しなかった。同郷の社会主義者縄本百太郎に、「革命党の中には領事館のスパイが潜入している。うっかり近付いてはいけない」と忠告されていたし、帰国後一緒に活動する長谷川市松や植山治太郎からも、「こちらの様子が領事館につつぬけになっている」という話を聞かされていた

からである。

この時期は同時にアメリカではロシア系ユダヤ人の女流アナキスト、エマ・ゴールドマンや、その夫ベルクマンが盛んに活躍していた時期である。一九〇五年（明治三八）以降は、ユダヤ人、イタリアの移民労働者たちを集めたIWW（Industrial workers of the world）の運動も非常に活発となる。このIWWはフランス流のサンジカリズムの影響を受けていて、加盟員は相当程度にアナキステイクに動いたのである。

ゴールドマンは夫が捕われるや、刑務所の地下までトンネルを掘って救出せんとするような大変度胸のある女であったが、その文章を読んでもみると、むしろ保守的人物に近い情熱と暖かみを感じる女性で、しかも弁舌さわやかにして、他人に関しては大変寛容である。そのためにアナキストに止まらず幅広い進歩層から支持されたのであるが、彼女はニューヨークのユダヤ人街オーチャード（後に金融トラストとなっている）で、社会主義伝導協会を開いていた。

直造はIWWには手紙を出して、何かパンフレットを送ってもらったことがあるといい、ゴールドマンの協会を訪ねたこともある。だが訪問した折には丁度ゴールドマンもベルクマンもどこかの争議の応援に行つて不在であり、会うこともできずに帰ってきた。私は先にも述べた通り、直造の体質とゴールドマンの資質に共通性を感じるものであるが、それでこの時もし二人が会しておれば……と想像してみたりする。

しかし直造が在米中親しく見聞したのは、IWW、社会主義伝導協会、サンフランシスコ革命党というよりは、むしろ、『Knight of Labour』（労働先駆者団）の活動であった。直造はこの

誰かと知り合い、引き続き後進の IWW に関心を持ったというこらしい。

この労働先駆者団というのは、アメリカの生活防衛のための自然発生的な労働運動で、秘密結社的な団体であった。例えば会員の誰かが首切られたら直ちに抗議に押しかけ、失業すれば扶けあうといったものである。団員の奥さん方の活動も中々盛んで絶えず日常生活上の問題を監視している。町のどこかの肉屋が肉を高く売れば、すぐと「どこそこの肉は高い。買うな」と張紙をして不売運動を起こすし、アパートの家賃を上げればやはり団員同志で家賃引下げの交渉をした

りするのである。

この先駆者団は後に IWW に吸収合併されたそうであるが、IWW にしても杓子定期的な型にはまった斗争を嫌い、つねに実際的であった。争議の仕方も変わっていて組織というものを持たず、IWW の切符さえ買えば、どこかの争議であろうと請け負いで援助にいった。

そうしたアメリカでの市民運動のやり方を直造は、感銘を持って眺めていた。

アナキズムとプラグマチズムというところ、あるいは変に思う人があるかも知れないが、そうでもないで、大杉栄なんかでもその理論の中にフランス流「生の哲学」とともに、アメリカ流「プラグマチズム」をとり入れていたし、確かに現実と行為のプラグマチズムには社会運動家の学ぶべき点が多くあった。IWW にはサンジカリズムの思想とともにプラグマチズムの影響があったといわれるが、さもありなんと思われる。

プラグマテストとアナキストの交流もあつたらしくて、一九三四年、ゴールドマンがロシアへ追放されて後一時帰国を許された際には、プラグマチズムの著名な哲学者ジョン・デューイらが

暖かく彼女を出迎えている。

直造はこれら急進的にして且つ実際のな運動（思えば自分の食堂のカウボーイによる破壊も、危機を感じた白人の食堂組合の自衛運動であつた）を学んで、それを日本社会に応用したのである。

その意味では、日本にいて幸徳や大杉や堺に影響を受けて社会主義者になつた人々とは、非常にやり方の経路が違う。もともと体質的に陽性で、「逸見売名王」と呼ばれるほど自己顕示的な性格の持ち主であるが、そうした資質がさらにアメリカの運動の実際を知り、強化され、吉三さんの表現によると、「ねずみの穴蔵」みたいな日本のアナキストの徒党には容易に組みし得なかつたのである。

大阪人の斗い振り

直造が足かけ十年のアメリカ武者修業を終えて、日本へ戻ってきたのは、明治四十年（一九〇七）の暮のことである。母親からの手紙で長兄が危篤であることを聞き、急いで大阪のわが家へ舞い戻ってきた。翌年、長兄が他界すると、直造はランプ製造の家業を整理した。

以後徐々に直造の活動が始まるわけであるが、直造の社会主義を考える場合に、もう一つ大阪という地盤を考えておく必要がある。直造は生粋の大阪人ではないが、大阪人といって差支えないし、吉三に至ってはなおさらのことである。大阪人としての逸見親子の社会運動は、やはり大阪的であつた。

一般に大阪という土地柄を考えるのに、やはり商業をもつてするのがよく、江戸期の大阪商人は江戸商人の政商的、御用商人的であるのに対して、余程平民的である。何といつても江戸は將軍のお膝元であるし、江戸商人の大半の顧客は武家であるのに対し、大阪商人の客筋は遠国、近国の平民である。したがって大阪もんは、江戸っ子のように田舎や在方ざいほうを決して見下げはしない。反対に単に武家であるからといって、珍重もしない。

「侍も町人も客は客」(「心中天網島」)であつて、その点大阪は余程江戸より開けていた。

しかも江戸商人と大阪商人と較べて、一見淡泊そうदैいて案外空言を弄し、ごくくさ(ぐずぐず)言うのは江戸商人である。大阪人は関東人のように小田原評定を好まない。事に当つてドシドシ実務を行ない、規則や評議に一々こだわらず、天衣無縫てんいむほうに振まつてしまふ。

むしろそれだけに大阪商人は何事も金銭で解決しようとする露骨なエゲツなさがあり、アクの強さがある。しかしそれをしも認めて、大阪商人の平民的感性や独立自存の姿勢は買うべきであり、理論や学問は軽視しても実際の何事も成果を旨とする生き方はとるべきと思われるのである。

いわばこれら大阪商人の諸特徴をすべて身につけていたのが、逸見親子である。彼らの運動はまさに大阪的であり、ことに幅広い人間性と現実的智慧において並はずれていた。

一体に大阪人は人間関係を大事にする。平民を相手とする商行為の上からも、大阪商人は敵をつくることをいやがる。そういう面が直造になると、四海みな同胞ということになりかねないのである。主義傾向にこだわらず運動をやつていた連中は、随分と直造に世話になつてゐる。直造

の家の二階には常時失業した組合員や、東京から逃れてきた運動家が数人タダめしを喰くつてごろしてゐた。仲間に対して同志的というよりは同胞的、あるいは身内の者という感じ方で接しているのである。

身内の者であればこそ、もし誰かによつて身内がいじめられれば敢然と戦いを挑む。

これはかつて和田久太郎と交替で大阪の『労働運動』(雑誌)を担当していた和田英吉氏の話であるが、大阪へ着いて逸見の家に逗留したところで警察に引つ張られ留置された。その年ちようど直造は岡山へ行つていて留守をしていたのであるが、五日目に家へ戻つてきてみると、和田がない。さあ、頭から湯気の立つほど怒つた直造は、すぐさま留置先の警察に駆けつけ、特高(特別高等警察)の部屋に怒鳴り込でいつた。

「うちにいた英さんを引つ張つてきたのは、誰や。俺の家にいた人間を何で引つ張つてきたんやあ——」

直造という人は図体がでかくて、押し出しがいい上に、例えば電車に乗つていて、車掌が「高麗橋三越前!」と呼ばわると、わざとみんなに聞こえるように、「車掌がああいうこというて盆暮に三越から手拭いもろてるんや」てなことを平気というような、タフとラフで有名な男である。それが血相変えて警察に怒鳴り込んだのであるから、警察でもびつくりして、翌六日目の朝和田を釈放してしまつた。

和田はそのことをひどく感謝して、「偉いもんだつた。逸見売名王とか何とかいうけれど、直造は明治的、勇気というものを持つてゐるんだつた」と回想してゐる。

また人間関係を大事にする大阪人は、いわば東京人が直球的であるのに対して変化球的であつて、人間関係の手續^{てんでん}手管^{くだ}に丈^たけている。直造はあれだけ悪家主攻撃に終始したといえども、真から相手を憎んでいゝるわけでもなく、家主には家主の相当の利を認めていて、それなりの抜け道もまた考えてやっていた。家主がちゃんと家賃のとれる方法である。そのことでまた借主は借主でまた便宜を与えられていた。

そうした意味での直造の現実的戦術というものは、大したものである。京都出のアナキスト山鹿^{がたじ}泰治^{たいじ}なんか印刷工上りのせいか、随分と生活的技術に丈^たけた人であつたが、直造の場合には同じ現実的であつても、運動的技術に長じている。ことに「法律相談所」を設置して以来の直造は、都合のいいことは法を循にとり、都合の悪いことは法の網の目をかいくぐりの大活躍であつた。

大学出インテリの理論的体系癖や倫理的潔癖さといったものはみじんもなく、悪に対しては悪をもつてしてもゴリ押しに押ししてしまうのである。またそうでなければ、天皇制権力に容易に勝てる時代でもなかつた。

吉三さんの話によると、娼妓^{しょうぎ}の足抜き（自由廃業）もよう、けやつたそうである。

その場合どういうやり方をするかという点、当時日本の公娼制度というのは、他人の籍に入つた嫁さんは働かすことはならなかつた。それでもし人妻を女郎にしようと思つたら、まず女の籍を外して一人もんにしなければならぬ。除籍してその後三年間とか五年間とか、借金してゆくわけである。

それから娼妓の取締り規則というものがあるが、それには一定の区域においておけとか、泊りがけで売春したらいかんと書いてあるのみで、性行為をさせたいという字は一つも書いてない。それはそうだろう。娼妓にとつて性行為は、当然のことであるから。

しかしこの二つの制度と法の抜け穴を利用して、女を逃がしてしまうのである。女は廓^{くわくわ}を抜けると警察にゆく。警察では、遊芸をするのが仕事やと思つて売られてきたけど、毎日変つた男と寝るとは取り締り規則にありませんから、こういう商売やめたいといわせる。その場合やめる理由としてもう一つ、天皇をかつぐ。「大日本帝国の臣民として生まれて、男に売春して金をふんだくるといふ生活は、天皇陛下の赤子としてよう、しない。廃業します」と。そうするとさすが警察も天皇陛下をかつぎだされて、よう、弾圧することができなかった。

残る問題は女郎屋側であるが、これは女が逃げている間に親兄弟を説得して戸籍謄本をとり寄せ、好きな男か誰かのところへ入籍させてしまう。その後戸籍謄本をとつて、本日より私は誰その家の内に決りました、女郎の鑑札^{かんさつ}は廓主^{くわくしゅ}がとりあげて、ないから、警察で停止させてくれといへば、それで警察も廓主もお手上げとなつた。

こうした逸見親子の実際的奸智^{かんち}ともいふべき戦術に警察もしばしば裏をかかれ、「また逸見一派にやられたあ——」と、頭に手を当てがって泣き寝入りをしていた。

もつともこうした大阪の運動家の特徴は直造ひとりにとどまるものではないので、他にも多く庶民的且つ実際的である。古くは大逆事件で絞首刑台上に登つた森近^{もりちか}運平^{うんぺい}は、自身は優れた園芸家であり、大阪時代は運動の実務家として抜きん出たといわれる。直造と同時代の木本^{きもと}凡人^{ぼんじん}た

る人は、青十字社を興して、失業者に「征露丸」や青物行商をやらせて救済に尽していたし、アメリカ時代の長谷川市松の奥さんはコーヒー屋台を引いて、お客を物色しては『平民新聞』を売って、宣伝活動していたのである。

貧民長屋を建てる

十年ほど前に吉三は、大阪市中で齢八十余りのひとりの苦勞人風の人に会った。その男は吉三をみつめるなり、「覚えてまっか」というので、聞いてみると、大阪のヤクザの親分で、昔、ばあちゃんの美代がランプ工場をやっていた頃の職人の一人であった。職人といってもその時分はまだ年端のいかない子供で、警察の連れてきた拾い子であった。

美代が神戸から引越してきた大阪の家は、先にもいうように今宮村の村社広田神社と金儲けの神様戎神社の二社にはさまれた辺りで、家の前にはうっそうとした杉の木がたくさん生えていた。付近には関谷町（通称ながまち）といって人口二千人あまりの貧民街があった。その貧民街の堀一つ隔てた畠地を譲り受けて工場を建てたのであるが、場所が場所だけに始終捨て子がある。それも赤子ばかりでなく、とうに就学年齢に達したような子供まで捨ててゆくのである。そういう子供があると、警察は美代の工場へ連れてきて、「また面倒してもらえんやろか」と置いてゆくのである。数十年振りにあった、かのヤクザの親分もその一人であったが、美代はそういう子供が来ると昼間は職人の手伝いをさせ、仕事が退けると夜学に通わせていた。

工場にはそうした拾い子の他に家出人や部落の娘、直造の姉、妻ならえの弟、妹、直造の弟など親類縁者数人が働いており、一種の共同体的経営をとっていた。工場の万事が家族的で、お互いがお互いを扶ける相互扶助の態をなしていたのである。当時は月四回休みがあるのは官庁だけ。普通の工場は一日と十五日の月二回の休みである。その休みの前の晩の十四日や三十日になると、吉三の家ではみなで御馳走して食べた。家の裏方に大きな池があつて、そこに鯉が養殖してあるものだから、それを網ですくってきて食べたり、直造がアメリカから帰ってきている時には、大きな肉塊を買ってきて、トンカツにして食べたりした。そんなふうだから、働いている人間が中々移動しなかった。

戸籍上は今宮村となっているが、実際はサンフランシスコ生まれの吉三ではあるが、幼児からこうした環境の中で育つて、貧民の世界というものを肌で掴むことができた。工場のまん前が広田神社であるが、境内には毎日朝早く貧民窟の子らがやってくる。拾い屋や下駄の職人や売春婦の子らである。売春婦といつてもここの売春婦は当時女郎屋が五十銭、釜ヶ崎の売春婦が二、三十銭の時代に、ただの十銭売春婦である。昔のおこも抱えて客を求めて歩いた「夜鷹」、戦後にいう「ジキパン」の種類であつて、そこらの川っ辺りや広田、戒の境内等である最低の売春婦である。吉三はそうした子らを集めて遊んでいた。

家がランプの忠屋なものだから、「忠やあ、遊ぼう」といつてくる。すると吉三は、「よっしゃあ」と外へ飛び出していった。

その頃、一厘あれば大福餅を買えた。それで家から一厘銭何十枚も持ち出して、「欲しいだけ使えや」とくれてやる。家には一厘銭が針金に百も二百もさして溜めてある。それが適当に溜つた

ところで駄菓子屋へ大きな金と交換しにゆくののであるが、ワルの吉三は始終この金を頂戴しては、貧民窟の小伴^{せがれ}たちに、「おい、まんじゅうこうてこい」とばらまいていた。

貧民の小伴たちは、なりは汚なくて言葉も粗暴であるが、工場労働者よりも人間的で優しいし、気持ちに暖かいところがあつた。

ところで日本に帰った直造であるが、長兄が逝つたのと、その頃には電燈が普及して、中国向け以外にはランプの需要がなくなつたので工場をたたんで売り払ってしまった。当時の金で約五万円の金が残つた。今日の価に換算すれば、恐らく億という単位の金だろうと推される。

その金が手に入ると、直造は半分の二万五千円を母親の美代に渡して郷里岡山に引つ込ませ、自分も半分の二万五千円の大金を得て、西成区松の池前（今の釜ヶ崎、労働センター）に土地を買い、一万円を投じて十軒ずつ向かい合わせ二十軒の長屋をたてた。

当時の釜ヶ崎には今のようないくつかの街はなく、最低の木賃宿^{きたせど}が十軒ばかりあるきりだった。同じところばかり廻つていては賈いが少なくなるので、奈良方面から住吉、紀州辺へお寺廻りする貧民が泊まるような宿である。そんな地域に長屋を建てて、当時日払い十銭が相場であつた家賃を日払い五銭（月二円五十銭）という破格の安さで貧民に入居させたのである。

これはかつて、アメリカのシアトルで安食堂を開いたのと同じ発想であつた。下層労働者に喜んでもらつて、自分も何とか食べていかれる、社会的にして、現実的な目論見であつた。しかし、今度のはもっと社会意識が進んでいて、もし成功したら、ちゃんとした社会事業家として運営していこうという腹積りであつた。自分の家へ帰つてきて、釜ヶ崎に数軒並んだ木賃宿のひどさを

みてそう思つたのである。

しかし、食うために精一杯のこれらの入居者は、直造の意図に反して、日銭十銭の家賃もよう、払わない。小学生の息子の吉三が親父が「家賃もろてこい」というので取りにゆくと、「父ちゃん呼んできいな」と相手にしない。それで直造がゆくと、赤いけ出しの娼婦ふうの女が片膝ついて、「大将大将ようきな、まあ上がんははれ」てなことをいって、結局は払わない。

初めは毎日持つてこいといつてあつたのだが、五日払いにしてくれの、二十日には払いますのといつて払おうとしない。それは考えてみれば当然のことでもあつた。当時一人前の男で一日五十銭、女工ならば三十銭ぐらいしか稼げない。その中から米代十銭を引いて残り四十銭からさらに五銭の家賃を払うとなるとたつた五銭の金でもやはり容易でなかつたのである。

事情を知つて直造は彼らのために福祉の作業を興したが、これも失敗であつた。

前の池を利用して直造は共同のアヒルの養殖も始めたが、誰も世話をしない。そればかりか、大きくもならないうちに次第に数が減り始めた。いい匂いがするなど思つてみると、それは捕えたアヒルを焼いて食べているのであつた。ただし、長屋の子供たちにおたまじゃくしや蛙やらを、百匹二銭で買いとるといふとみな集めてきた。それを煮て刻んでアヒルに喰べさせたのである。

また共同の五右衛門風呂を設けて、交代で沸かせといつても誰もやらない。結局、燃やす古下駄や傘をごみ箱等から探してくるのは吉三の仕事であり、焚きつけるのは留守番の腰の曲がつた婆さんでしかなかつた。

おんぶすれば、だっこしてくれというのが実情である。結局は直造も安い家や風呂を与えることが、貧民の解放にはつながらないことを自覚し始める。そしてまたしても長屋を他人に売り払うと、今度は姉のユキの養子小川七五三しちごの縁で、日活大阪支社の千日前日本館を営んだり、戎橋南詰で楽焼屋を開いたり、映画の看板を請負ったりして生計をたてた。

映画館の支配人となる

この前後、サンフランシスコ社会革命党の長谷川市松が帰国してきた。長谷川は一時郷里の長崎に帰ったが、大阪の直造を頼って職を求めてきた。大逆事件（明治四三・一九一〇年）後の厳しい警戒の中にあつては、始終尾行のついでに長谷川なども雇ってくれなかった。それで直造は小川に話して、日活の弁士の台本係に雇わせてやった。

そしてこの長谷川との再会が契機となつて、直造はハッキリ社会主義の道を選ぶようになった。しかし彼は従来の日本のアナキストの仲間には加わらなかつたし、社会主義を選んだといつても、まだ少々間があつたが、やがて勃興し始めた労働運動の世界にも飛び込まなかつた。

自分には自分の道がある、とはつきり自覚していたのである。

大体、直造には金がある。喰べる心配というものがない。また事業才があつて運動に専念するようになってからでも、絶えず金が入ってくるような仕掛けになつていた。借家人同盟が始まつてからの直造は、靴に一杯の札束でも平生持ち歩いているのである。そこところが、他の社会主義者の環境とまるで違つており、本人の運動の仕方なり考え方なりが変わつていて当り前とい

うところがあつた。

直造の家族は家族で忙しく働いていた。工場をやっている時に、水崎町の方にガラスランプのケース（紙箱）を入れる倉庫を借りてあつたが、今度はその倉庫を利用してボール箱の製造業を始めたのである。これは儲かつた。何しろ家族親類のタダ働き同然の人間が七人もいるところへもつてきて、ケースの利潤が大変大きい。

三尺三寸または四尺のボール紙、一枚一銭のを買ってきて、それで一箇二銭の箱が十箇ぐらいとれるのである。原価一銭で後はノリと手間だけで二十残余になるのだから、商売は儲かつて仕様がなかつた。

これだから直造の家に始終数人（多い時は十人もいた）の失業した労働組合員や運動家が、タダ飯喰つてごろごろしていられたのである。家に四人や五人の居候がいても何ともなかつた。

この事業はその後直造が死んでなお、昭和四、五年頃（一九二九、三〇）まで続けられ、吉三なんぞ、常に懐ろに十円、二十円の金を入れて歩いて、朝飯喰つては運動に出かけ、必要とあれば気前よく金をばらまいていたのである。

家人かじんがまたそのような活動を許していた、ということも考えるべきであろう。

直造の母親美代というのは、しっかりもので、直造を却かえつてけしかけていたそうであるが、和田英吉氏の話によると、直造の妻ならえもまた運動家にもふさわしい偉い女である。出は大阪で一番大きい人力車屋の娘であるが、直造や息子の運動にも大いに理解があつて、「夫や子供のやっていることは、借家人の金に困っている人たちを助けてやっているんだから、間違つてはおりませ

ん」と語っていたそうである。

それでなくとも寄宿人の大勢の世話がある。また直造のよその女に子供ができて、その子供の親が死ぬと、自分のところに貰い受け、吉三の弟として育てもした。つまり家族ぐるみで、直造らの運動が支援されていたわけで、吉三は後に、「知られざる人々」と題して、「私がアナキストの一兵卒に投じたのは、社会主義者の父と運動を周囲に持ったことに発してはいるが、私をして革命運動に、青春と情熱を捧げる決意を抱かせたのは、単なる思想の修得からではなく、困難な戦いと生活苦との二重の戦いを斗った婦人達の生活に、接してからである。」と書いているのも肯ける。

明治四五年（一九二二）一月十五日、千日前におこった大火は三日間燃え続けて、南区の中心地を一望焼野原にしてしまった。そのために直造の日本館も焼けてしまった。

しかしこの大火はかねて計画中の「新世界」建設を一層早めるものとたった。明治三六年（一九〇三）に直造が西洋料理店を出した国内勸業博覧会の後は、大阪土地建物会社が土地の借地権を一括して手に入れて、そこに興業を中心とする歓楽街をつくり上げんとしたのである。呼び物にパリのエッフェル塔を真似て、「通天閣」をつくり、その周りに映画館を十ばかり集めて、焼失前の千日前の繁華をそっくり引き継ごうとした。

「新世界」はようやく七月に仕上がり、日活は再度戎館を直営して、小川を責任者にした。しかし小川は支社にも籍があつたので直造がその代理を勤め、宣伝企画を担当した。そうなると大阪の社会主義に関係ある者が、寄り集まってきた。長谷川は仕事にかこつけて連日やってきたし、

他の仲間にとっても絶好の集会和連絡場所となつたのである。

集会は月一、二回、映画がまだ終わらない七時か八時頃やってきて、ゆっくりと映画を観てから、終演後に舞台横の弁士控室に集まるのである。人数はせいぜい七、八人、あらかじめ直造の方から無料入場券が与えてあるから、それをもって入ってくる。会合の常連は長谷川市松、武田伝次郎、岩出金次郎、松浦忠造、横田宗次郎、寛総彦などといった連中であり、このうち武田は大逆事件の武田九平の弟、岩出は同事件紀州組の残党であつた。

吉三は父直造のいっつけで、武田伝次郎の家にはよくいったそうである。市電で長堀橋へ行き、玉造線に乗りかえて空堀町で降りる。その出かける先の家の主人が、大逆事件の無期囚武田九平の弟に当ることが、七つくらい吉三にもおぼろげなら分かつていて、父の便りを重大なものに思い込んでいた。

武田伝次郎は森近運平の大阪の仕事を引き継ぎ、大逆事件後の運動の火を守り続けた第一の人であるが、兄九平と同じく金属彫刻工でよい腕を持っていた。いつも内弟子四、五人を置いていたが、ギロチン団で獄死した山田正一はじめ幾人かの同志がそこから生まれた。仕事を終えてからの酒が何よりも楽しみで、ある時晩酌の手をとめて、強い近眼鏡で吉三をのぞき込むようにして言った。

「みんなではよう、兄貴を解放してやってなア……わしが生きているうちになア……」

伝次郎の夫人のカネはいつも大勢の居候のために、飯の支度ばかりしていた。

そんなある日、カネは吉三に、

「坊、大きくなったら何になる？」

と問うた。それで吉三が、

「うん、革命家や」

と答えると、思いがけなくも力一杯抱きしめられ、涙声で何度も、

「エライ子や、エライ子や」といわれたそうである。

それは日本の暗い冬の時代であった。

歌人の石川啄木が大逆事件に触発されて、「今や我々には、自己主張の強烈な欲求が残っているのみである。……すべて今日の我々青年が有っている内訌的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき状態を極めて明瞭に語っている。——そうしてこれは実に『時代閉塞』の結果なのである」と書き、判決のあった当日には、日記に、

「今日程予の頭の昂奮していた日はなかった。……ただすぐ家へ帰って寝たいと思った。『日本はダメだ』と記したような時代であったのである。

むろん、処刑直後の社会主義者の圧迫も厳しい。当時はまだシンパ程度の運動経歴しか持っていない直造の身辺にすら四人もの尾行がつき、二人ずつ交替で二十四時間、夜中も屋外で外とうや毛布にくるまって見張りを続けている有様であった。しかしそうした厳しい監視の中にあっても、直造らは一向にへこたれることもなく斗志を燃やしていた。